



「50年前の旅日記を読む」 1夜

旅が終わって4年後に日記を原稿用紙に清書しはじめた。「旅の記憶が時間と共に消えていく、書く事でこの旅行と区切りをつけようと思った」と話す親夫さん。

トークは親夫さんの子ども時代からはじまった。

仙台の高砂の農家に生まれる。

手伝いはしたが父は「ここでは農業する場所ではない」と農業を教えなかった。親戚に工務店や大工がいることもあり、建築の世界へと足を踏み入れる。

高専時代にオートバイで日本一周の旅に出掛ける。

バックパッカーが流行っていた時代、家族に反対されたが1週間掛けて東北・北海道に出掛け、翌年には返還前の沖縄まで旅をする。

北海道に向かった時、「海を渡ったことが自分の乳離れだったように思う」と親夫さん。

その後東京へ就職するが、家の都合で仙台に戻る事になり、もうサラリーマンに戻る事は無いと思ひ、今しか出来ない旅に出たいと思った。

高専時代に出掛けたバイク旅の延長線にこの旅があった。

1972年という年は、2月に札幌冬季オリンピック開催、ベトナム戦争へ向けて沖縄の基地から飛び立つ米兵たち。

グアム島から残留日本兵の横井昭一さんが帰ってくる。

戦争の影がまだ色濃く残る、日本も世界も激動の時代だった。

「今しかない」という決意があった。



日本 横浜港 見送りの風景

.....

「未明行路」朗読① (日本)

決意

旅立つ日は昭和四十七年四月四日の予定である。出発まであと十日となった。もう二度と日本には帰れないかもしれないという気持ちは、自然と私を肉親や親族や周辺の人たちとの別れの気持ちにさせた。後で知ったことだが、母は夕方になるといつも泣いていたという。それを父は戦争にやったつもりであればと母に語り、自らを鼓舞したという。親としても大変だったようだ。当然親は私の旅行を引き留めようとして母の父熊太郎に相談したそうであるが、祖父は「そんなに元気がいいのなら、やれやれ」と言って、むしろ勧めてくれたという。母は私の旅を引き留める手立てを失い、諦めるしかなかったそうだ。

三月二十九日、飯塚と会う。三月三十一日再び彼女と会った。突然結婚することが決まった。それまで行き詰まっていた彼女との関係は、旅立つ直前になって思いがけなく急速に進展した。旅立つ私にとっては全くの不意打ちだった。予期せぬ出来事を実感としてつかめぬまま、そして無事に日本へ帰らなければと思いながら、私は出発することになった。

.....

母が泣いていた事は旅から戻って知る事となり、この決意で出てくる飯塚さんは後に奥さんとなる。

横浜港からナホトカへ船が出発して旅がはじまる。

.....

「未明行路」朗読②（ソビエト）

4月6日

一八時頃税関がやってきた。女性の役人だった。同室の若者たちは念入りに調べられたが私はなにもされなかった。しかし船から降りるとき、私に初めての事件が起きた。急いで降りようとしたためか係員に問いただされたのである。ロシア語で話してくるので理解できなかった。乗船者は下船する時カードを係官に渡して許可される。私は船の仲間たちが先に降りてしまったので一緒に行こうと急いでカードを係官に渡したのだが、出口が混雑してすぐに降りることができなかった。そのうちに係官は私がカードを渡したことを忘れてしまったようである。しかし急いで降りようとしたために怪しいと思われたのだろう。私は英語で一生懸命カードを渡した事を説明した。しかし彼には理解できないようだった。何度繰り返したことであろうか。乗船者はそのうちにどんどん船から降りて行った。そしてとうとう私だけになってしまった。それが本当だったかどうかはわからないが、私には彼が日本語で言えと言っているような気がした。あるいはあまりにも言葉が通じないのでこれ以上説明を聞くことに嫌気をさしたのかもしれない。とにかく私が手渡した番号を日本語で伝え、やっと許可されて下船した。この時私には、外国人には英語を話せば言葉が通じるという思い込みがあったことに気がついた。やっと解放され下に降りた時には、船から降りた旅行者の姿はどこにも見当たらなかった。港周辺を旅行者の姿をさがしてうろうろしては引き返し、道行くロシア人に英語で聞いてみても全く言葉が通じなかった。私はたった一人に取り残されてしまった事を知った。

.....



ナホトカ

ナホトカからハバロフスクへ行くツアー中仲間とはぐれてしまうという、のっけから大事件で旅ははじまる。後に仲間たちと偶然（！）合流。

ハバロフスクから初めての飛行機でモスクワへ。

モスクワで初めて地下鉄に乗る。深い、核戦争に備えて防空壕として作られた地下鉄。駅ごとに一つの宮殿のようであった。それはロシア革命の時にブルジョアから接収したものでもあった。赤の広場、ナチスドイツがロシアに攻めて来た時（実際負けた）の戦勝記念で持ってきた赤い御影石で出来ている。

広告の看板が見当たらない。共産圏に入ったと改めて感じる。

「槌と鎌」のポスターが貼られている。コーラもチューインガムも無い。そういう場所だった。

その後ツアーはヘルシンキで解散となる。

北欧の旅が始まる（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）



ヘルシンキからヒッチハイク

ヒッチハイクでフィンランドを廻る。

ヒッチハイクのやりやすい国であった。おばあさんやお巡りさんもヒッチハイクをしているのを見る。

スウェーデンに入るとヒッチハイクが途端に難しくなり、2カ月自由に使えるユーレイルパス（日本で購入）を使っの電車の旅が始まる。

.....

「未明行路」朗読③（スウェーデン）

4月16日 曇り

私たちは列車内で宿泊しようと考えた。夜行列車に乗れば金は使わずに済む。彼は現金をかき集めてできるだけ遠くの駅までの切符を買った。ヘルネサンドまでである。彼は再びヒッチハイクでコペンハーゲンへ向かう予定だ。私は、現金はほとんどなかったが、二ヵ月間有効のユーレイルパス（ヨーロッパ周遊券）を持っていたので、ヒッチハイクの旅に終止符打ち、鉄道での旅を始めようと思った。こうして彼とも別れることになった。私はストックホルム明朝五時着の列車に乗ることにした。午後八時三十分、吉田さんと別れた。再びコペンハーゲンのIPCで船の仲間たちと会う事を約束して。互いに独りぼっちになり、それぞれ二日間ほとんど食べていない空腹感を抱きながら、今日を過ごすための明日への夜行列車に乗った。

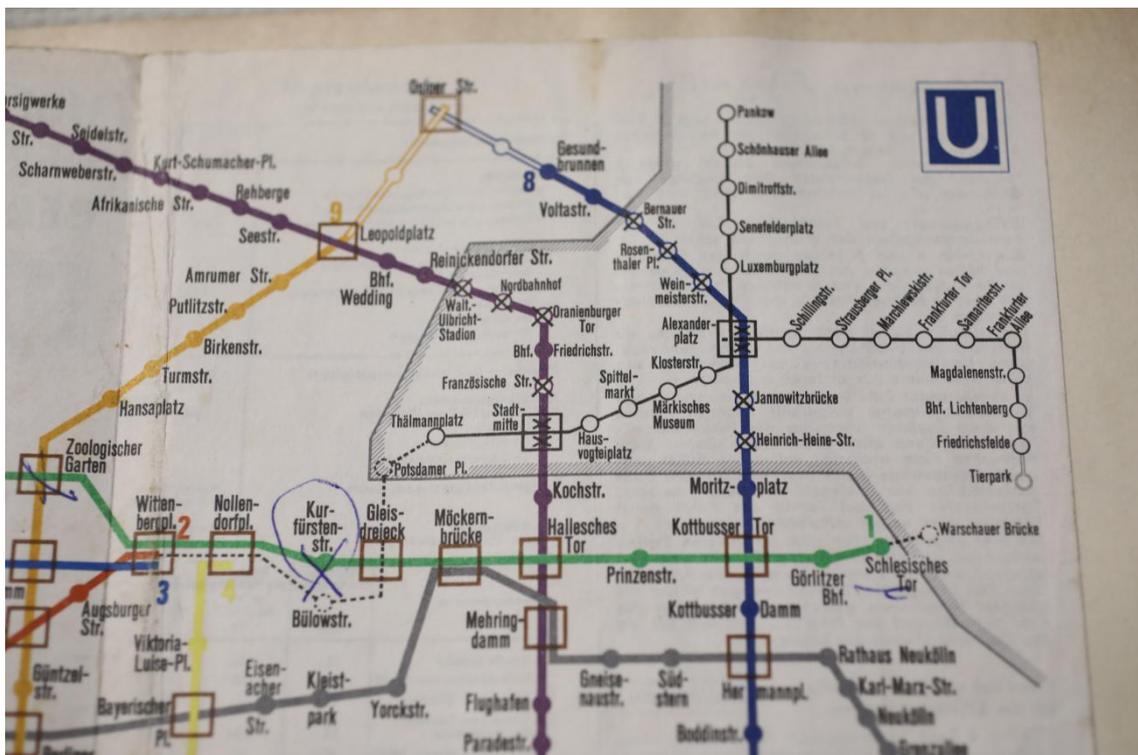
.....

小岩：最後の2行がすごく印象に残った。こういう言葉はその時思いつくんですか？

高橋：そうですね。その時に思った事を日記として書きました。

小岩：そういう文章が散りばめられてこの旅行記の魅力なんですけども。その時思いつくんですね。

旅は西ヨーロッパへ（オランダ、西ドイツ、東ドイツ、ベルギー、イギリス、フランス、スイス、オーストリア）



ベルリン地下鉄マップ（一部）

（ベルリンの地下鉄路線図を見ながら）

小岩：地下鉄の路線図で斜線が入っている所がベルリンの壁、知識としてしか知らないとよく分からない部分でもあったのでこれは衝撃的でした。×印がついている、東ベルリンでは止まらない。壁の向こう側は止まらないという。

高橋：西ベルリンから地下鉄を乗って、東ベルリンの駅の中には薄明りの中自動小銃を持った兵士が巡回していてスピードを落とさず進んでいった。

当時東ドイツ国内の中に陸の孤島のようにベルリンがあり、その孤島のような都市が東西に分かれていて、そこに冷戦の象徴である壁が作られた。

東でも西でも旅の人間と分かると優しくされた。

.....
「未明行路」朗読④ 西ドイツ

4月27日 晴れ時々曇

ドイツの田舎は美しかった。家々は赤レンガ造りで力強く、多彩さはなかったが緑の中に建っていた。庭の木々は今花盛りで、白い花が咲き乱れ、どの家も塀のないこじんまりとした庭を持っていた。

列車内でドイツ人の老人と中年の夫婦と同じ部屋になった。ヨーロッパの列車は仕切りがあって、向かい合った席が一つの部屋になっている。彼らはとても親切にしてくれ、いろいろとアドバイスをしてくれ、わからないところを教えてくれた。私が列車の窓から写真を撮ろうとすると、彼はカメラを押さえて撮影しない方がいいと注意してくれた。リンゴとチョコレートをごちそうになったので、コペンハーゲンの地図で鶴を折ってやるとナシとビールをすすめてくれる。この様に言葉はあまりわからないけれどもドイツ人の親切さが身に沁みるようだった。どの国でも親切にされるとき、私たちは言葉を忘れ、互いに心がささやきかける。今会ったばかりの見知らぬ人に温かい心を差し出されると、私は快い痛みを感じる。この親切なドイツ人の瞳のその奥にはどのような体験が刻み込まれているのだろうか。戦争の深い傷を内部に秘めているような気がしてならない。

.....
ベルリンは活気のある街だった。働いている様子から見ると日本に近いのではないかと思った。エネルギーなこの街でなら暮らしていけると感じた。



東ベルリン 市街戦の跡

.....

「未明行路」朗読⑤ ドイツ 東ベルリン

4月28日（晴時々小雨）

最初は東ベルリンの復旧は西ベルリンと同じ程度だと思った。ユースで聞いた訪問者の話は嘘だと思った。しかしながら街に深く入り、うろつくうちにそれが誤りである事がわかった。少し表通りから外れると建物の壁にはおびただしい弾痕が通り一面に残っていた。市街戦の痕である。表通りを外れなくてもいい。博物館や美術館のドームは爆撃や砲火でもぎ取られたまま、穴だらけになって廃墟と化していた。記念碑的な意味合いの広島ドームのようなものとは違う。もう戦争が終わって三十年近くも経とうとしているのに、まだ戦争の傷跡が建物に残っているという事は、私にとって思いもしなかったことであり、驚くべきことであった。日本では原爆ドームや博物館の展示物を除いて

市街から戦争の傷跡を探すことは不可能である。このような忌まわしいものは私たちの周りから全く姿を消した。そして戦争の事は昔語りになりつつある。しかし東ベルリンでは戦争はまだ生々しく生きている。ベルリンの人々はそれぞれに忌まわしい思い出を抱きながら、この弾痕や白い壁と共に生きてきたのであり、戦後生まれの人々もこれを直視しながら成長してきたのであろう。傷は生々しく戦後三十年近くも経とうとしているのにこの都市では癒えてはいないのだ。この穴一つ一つに国家存亡を賭けての戦いが行われたに違いない。この様に東ベルリンははるかに戦後の復旧が遅れていた。同じ敗戦国でもドイツの場合はより悲劇的な道をたどっているのだ。

.....

1989年ベルリンの壁崩壊。

小岩：ベルリンの壁が壊された時は親夫さんはどんなことを考えましたか？

高橋：テレビで見えていましたね、ハンマーで叩いているのは見ましたね。

うーん……。ひとつは共産圏の大きな時代が動いて良かったなあという感じですね。

小岩：冷戦が終結してということですね。

高橋：はい、はい。



パリ モンマルトルのにわか雨

.....

「未明行路」朗読⑥（フランス）

5月12日 晴れのち雨

〈モンマルトル風景1〉

パリの晴れた日にしゃれた格好の若者たちはフランスパンをかじりながら歩いていく。
パン屋のおばさんは長いパンをバケットにたくさん入れて信号の変わるのを待っている。
身なりのきちんとした婦人は裸のパンを一本カゴに入れ坂を下りてくる。
日射しのかかった石畳に、にわか雨が降り、雷鳴が鳴り渡る。
緑の並木は強い雨で色を失い、道行く人は路地に逃げ込む。
傘を差す人が急ぎ足で行く路の両側を雨水が走り、
人々はカフェテリアのテントの下に佇み
降りしきる雨の様子を眺めている。
その後ろで椅子に掛けた画家たちは、懸命に客の肖像を追っている。
光る鋭い眼と細い鉛筆の先が一つとなり、
雨上がりを待つ客の後ろで、芯の先を息で湿らせ肖像を追っている。
雲が行くと雨に洗われた石畳の坂に夕日が射し、
道はオレンジに染まり、きらきらと光り、濡れたものすべてが光を放つ。
カフェテリアのテントの下から、庇の下から空を見上げ
いっせいに人々は光の中へ踏み出していった。

.....

小岩：本当に情景がすごく浮かんで来ますね。これはどこで書いたんですか？

高橋：多分・・・その場で書いたかもしれないし・・・時間たっぷりあったので。

小岩：時間たっぷりあるようには思えないんですが・・・(笑)そうですか。すごくいい写真ですね。



スイス グリンデンワルド

.....

「未明行路」朗読⑥（スイス）

5月22日 晴れ

〈アルプスの少女ハイジの気分で〉

この村は乳の匂いがする。乳牛の匂いだ。どの家にも牛小屋がある。民家はマキが割られ積み上げられた赤い屋根の家々だ。細い山道を少年が牛を連れて登ってくる。

この村は花の村だ。村中がタンポポの花で黄色い。タンポポの咲き乱れている山の麓の野原に寝転ぶと、タンポポの白い穂の群れが山へ向かって飛んでいく。薄紫の小さな花束を手に持って若い婦人が下りていく。

突然、カランカランとベルが鳴ってその方向を見下ろすと、草原に細く白い道は続き、牛がゆったりと草をはんでいる。丘陵には小さな家々が点在し、戸外には誰もいない。鳥の声と水音だけが聞こえている。ここは空気が薄いから、急いではいけないのかの様に何もかもがのんびりとしている。

羊の群れが一日中草を食んでいた。私は一日中草の上に寝転んでいた。乳牛が一日中草をはんでいた。タンポポやスカンポやキツネのボタンや一面に生えている若草の緑の上を雲の影が走っていく。青空の下を影は雲を追いかけて走っていく。緩やかな山の麓の草原を新しい靴をはいた子供のように走っていく。そしてここには誰もいない。

.....

小岩：これ本当になぜこんな文章書けるんだろうと思うんですけど。やはり雲の影が雲と一緒におりてくるんですね、それを新しい靴をはいた子供のようにってというのは、いやぁやられました。

高橋：自分でもどうして書いたか記憶は無いんですが…。

南ヨーロッパへ（イタリア、バチカン市国、南フランス、モナコ公国、スペイン）

高橋：ピレネーを超えたらヨーロッパではないという文章は何に書いてあったか記憶は無いんですが、確かに乾燥した気候になり、オリーブが印象的、確実に違う文化圏を感じる。色濃く回教の文化が入っている。

学生時代は美術部、仕事は建築士という親夫さんは美術館や建築をたくさん見てまわっている。イタリアでレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」を是非見たいと足を運んだが、教会の中で見た時は思ったより感動しなかった。

これがあの有名な絵か…。

帰ろうとふっと脇に飾ってある写真を見てびっくりする。

戦争の爆撃で粉々に壊された建物と「最後の晚餐」が板で覆われた写真だった。

今私が立っている部屋がかつていかにひどい状態にあり、その後修復されたのかを知った。



サグラダファミリア

スペインではアントニ・ガウディのサグラダファミリアへ。

100年経っても三分の一も出来ていない。

ガウディ自身が生きている間の完成は不可能との考えで着手され、後の世代へと引き継がれて造られる建築。

今まで私達がやっていたものは何なんだろう。建築って何なんだろうと考えてしまう。

風化した部分がありながらも継続される。

窓ガラスはべっ甲を使っていた。考えられない。衝撃だった。

同じくスペインでのピカソ美術館も衝撃的だった。

権威的な建物の美術館ばかりだったが、ピカソ美術館はすっきりした近代建築のようだった。

とにかく数に驚いた。落書きみたいなものまでそこにあった。

「人は一生で大したことは出来ない」というのは嘘だと思った。こんなに物凄く、人はやる事が出来るんだ。人間ってこんなにすごいんだな、と感じざるを得なかった。

小岩：親夫さんは今写真を撮られていますけど、色んな記録を見てるとピカソと同じだなと。

これ位が限界だと思うところを超えているなと思います。すごいなと思います。

小岩：旅が疲れて来たな、っていうのはありましたか？

高橋：長い旅の中で最初の新鮮さが無くなる、美術館もたくさん見たけど新鮮さが無くなってくる。

不安も出てくる。お金が無いから安いものを食べていると痩せてくる。今まで感じたことがない自分は生き物なんだなあとと思うようになってくる。いろんなことが麻痺してくる。

「旅は3カ月が限度」と言われている、「1年過ぎると放浪になる」と。

これから訪れる貧しい国へ足を運ぶと宗教や人間の生きる目的、そういうものを考える旅になってくる。

旅費の関係もあるが、ヨーロッパの人達は日本を、アジアをどう見ているのだろうと思いこのルートにした。逆ルートだったらどんな旅だったのだろう？

帰ったら決まっている事があった。みな何かを求めて旅に出たが、自分の旅はそれとは違う事に旅先で出会う人達に気付かされた。

これからアフリカ、中東、インド、ネパールへ。

(1夜終了)